

紅い花

(十五) 魔物への覚醒

琉紅

(十五) 魔物への覚醒

美久は本丸の小部屋に運ばれた。甲冑を全て脱がされ、手当を受けた。

体の震えが止まらなかつた。顎から首筋、右腕にかけて血が滲むほどの傷を、幾つも負っていた。

医師が慌てて、治療を始めた。

賢龍は、美久の側にそっと寄り添った。

「遅くなってすまぬ」

美久は、まだガタガタと小さく震えていた。

「こ、怖い……」

「戦を経験したのだ。今まで、頭のなかでの戦いだつたが、初めて命を取り合う戦場を見たのだ。大丈夫か、美久よ」

美久は自分の首筋に触れて、赤く染まった手を見た。

自分の周りには、傷ついた兵士らがのたうち回り喘いでいる。その中に見慣れた顔を見つけた。

「潮平殿……」

それは美久を最後まで護衛していた潮平だつた。まるで静かに眠っているように見えたが、もう息をしていなかった。

「ああ、ああ、神様、神様、いらつしやるのですか？ 私たちをお助けください……ご覧になっているのなら」

「美久、私が間違っていた。やはりあの時、連れて行くことを止めるべきだつた。つらい思いをさせてしまったな」

「神様、神は、世界の神様、お父さん、お母さん」

「すまなかつた美久。もう、島へ戻れ、まだ間に合う」

賢龍は、涙にぬれた美久の頬に振れ、力強く抱きしめようとする。

「美久よ、あの静かな島へ帰るがいい。そなたは、神人であろう」

美久は賢龍の腕の中で震えた。

(ああ、力、男達の力の世界……私も、戦わなくては、もう、神人ではない)

彼の腕に触れると、切り傷が至る所にあつた。

額からも血が一粒、滴り落ち、それは美久の頬に彼の体温を伝えた。

彼女の体は、それが落ちる度に稲妻の衝撃が走る。

賢龍は美久の頬に付いた自分の血を、指先で拭き取った。

二人が供にする時間の間があつた。

美久は立ち上がり、自分の両手を見る。

「私の血、私はあなたの妻。王妃として、最後まで勤めを果たすわ」

「もうよい。苦しむな……」

賢龍は、これ以上言葉が出ない。

一方で美久の目は、ぎらぎらとしてきた。

「もう私は、神人ではありません。あなたと伴に」

「もう、いいと言っておるのじゃ」

美久は、賢龍の腰に差してあつた刀を抜き取り、部屋の外へ出た。

「おい、美久！」

追いかけてくる賢龍に刃を向けた。

「我は、最高軍師」

美久は、左手で自分の流れ出る涙を止めようとする。

頬と、目の回りに血が付いた。何度も拭き取ろうとしたた

め、美久の顔は鬼か夜叉のように赤く染まっていた。

「北山の兵士らよ、私に命を預けよ」

その声に、全ての兵士は美久の方へ顔を向けた。

美久は足を引きずりながらも最前線の第一の城壁へ降りていく。

「私が、皆を勝利に導く約束をする。この刀に、この力に、集まれ！」

皆、美しく勇ましい美久を見て、逆に微動だにできなかつた。

彼女は周りを見回し、一人の若い将兵に目で合図を送つた。

この時の為にと用意してあつたのか、横の通路から木材で出来た押し車、両脇に四つの車輪を有する大きな箱が現れた。

この美久の計画は、数人の将兵しか知らされておらず、賢龍もこれから何が起きようとしているのか分からなかつた。

兵士は用意してあつた子猫を美久に渡し、黄色く塗られたシーサーの置物を持ち隣に立つた。

美久は震える猫の頭を優しく撫でながら、

「この城、守り神の石が裂かれ、そこから生まれ出た子猫がおる。それと神の化身、獣の置物、二つを合わせ、神の野獣となり、勝利を導いてもらう。ニライカナイの神の教えにも従うものだ」

美久は、兵士からシーサーの置物を受け取ると、子猫と獣の置物を高々と掲げた。

そして次の瞬間、同時に木箱に投げ入れた。獣の置物が割れて砕け散る音とともに、刀を刺し込む。野獣の叫ぶ声が響く。子猫の鳴き声とは違い、大地をゆらすような声であつた。

子猫は横からこっそり兵士が取り上げ、懐の奥に隠した。野獣の声は、再び響き渡り後ろの山にこたえました。

皆が動揺し、馬が嘶いた。それと同時に木で出来た囲いの蓋が取り払われた。

巨大な虎が唸り声をあげ、顔を持ち上げた。

昨日から水だけしか与えられていないため、今にも生き物を見ただけで飛びかかって噛みちぎりそうな勢いである。虎は首輪をかけられ、檻に入っている。

後方には槍と刀が多数集められ、扇の方を成している。それは晴れ渡った日の光をまぶしく跳ね返している。

さらにその後ろには城の絵が描かれた屏風が建てられている。本丸の壁からはぎとってきたものだった。

その前で美久は、

「この神の野獣と共に」

と、空手を交えた剣術の踊りを、長刀を手に美久は始めた。父の演舞を見た記憶が元となるが、彼女独自のものであった。蝶が舞うようにも見える。強烈な何か、彼女の体を借りているようだ。

兵士らの多くは見惚れて、又ある者の表情は恍惚としてきた。

昨日の夜、美久が平地で戦うこの戦車を構築していたのである。インド、東アジア地域での野獣を使う戦法を美久は知っていた。ニライカナイの海岸への漂流物から得られた知識だった。美久の一連の舞が終わった。そして、長刀を手に、力強く真上、天に向かって突き刺した。

「城で生まれたあの子猫は、神の化身となった。我らと、供

に戦う為に」

「うおーっ」

兵士らは興奮のあまり涙を流しながら、刀を天に向ける。男達の声、響き渡る虎の遠吠えが響き渡った。

美久の刀を持つ雄姿、神の化身を呼び込んだという言葉に陶酔、いや妖あやかしに倒錯しているのである。

その混じり合った声は、四方八方に広がっていく。

尚巴志、大君の本陣は、隠密から状況を知らされた。大君がため息を吐きながら、

「美久よ、何処どこで学んだのか。偽りの魔術を見せ、闇の力、恐怖を利用するのか。もはや蛇、鬼じや。神と魔物は紙一重じや」

大君の顔色が悪くなる。

さらに付け加えて、

「兵士らは洗脳され、死をも恐れず突進してくる。獣けものの唸うなりに重なった彼女の姿は女神、いや最強の軍神に見えている……………」

右手の震えを止めきれない。

尚巴志は立ち上がり、

周りの将兵等に向かい顔を強こわばらせて、

「これからが本当の戦だ。心してかれ」

北山軍は門を開き、虎を乗せた押車を先頭として進軍した。これまで虎の世話をしていた四人の兵士がそれを押した。

虎は急に目前に現れた広がる大地から血の匂いを嗅ぎ取り、そこにいる敵の馬や兵士等を食らおうと、檻の隙間から鋭い爪を伸ばしてきた。

台車を押す兵士もその虎に慣れていないはずが、今回は恐怖に押し倒されそうになった。板や楯を持った兵が、虎の前を歩く。前方から飛んでくる矢をそれで防ぐ役だが、後方から唸りに近い虎の声を背に、手元、足元の震えが止まらない。台車の傍らで歩き進む美久の指示の元、兵の配列も弓の先の形をなしていた。

美久は後ろへ顔を向けて叫ぶ、

「全軍、このまま敵の本陣を攻撃する」

「おーうっ」

最後尾の兵士まで呼応した。

敵の騎兵隊の馬は、虎の飢えた声を聞くと、飛び上がった。怖がり兵士を振り落とし逃げようとする。

青江率いる連合軍の先鋭兵等も、地鳴りのような低い声に恐れをなして、怖じ気づき腰を抜かしている。その勢いに乗

じて、北山の歩兵は彼らに容赦なく槍を刺し、刀で切りつけた。

今帰仁の城前に布陣していた全ての連合軍は、中山の本陣へ撤退していった。隊列をなさず、乱れたままである。

それを見た美久は兵を集め、弓矢を本陣へと向けさせる。そして角度を指示した。

一斉に束となった矢が放たれ、逃げまどう連合軍と中山の兵の塊に、豪雨のように突き刺さった。

青江も聞こえてくる虎の声で、恐怖のあまり指揮を忘れて両耳をふさいだ。そして兵等にまみれ、気がつけば尚巴志と大君の居る陣営まで戻っていた。

賢龍の騎兵隊は、それらを追撃し切りかかる。しかし尚巴志の直属の先鋭なる重騎兵隊の数は多い。百戦錬磨で厚い城壁のようだ。

美久の指示のもと、虎の戦車を先頭に長い槍を持つ歩兵を揃え、その後ろには刀を持つ兵等を整列し鋭い槍の形、陣形に変えた。最後尾には馬にまたがった騎兵隊。突撃の最終陣形で進み始めた。

中山本陣の旗が見え始める。天幕内の陣営、尚巴志側近の將兵等もざわつき始め、撤退の号令が出てもおかしくない状況となった。

大君の顔は険しい。

北山軍後方の、歩兵の速度に合わせて進む賢龍が率いる最強の騎兵隊が見え始めていた。

尚巴志は、軍師美久から、最終決戦の突撃タイミングを待っているかと、動きから感じたのか、不意に身震いをした。

実際、先頭を進む刀を持った美久の右手が、高々と上がる号令を待っていた。

その時、城の本丸が燃えているとの情報が、賢龍と美久に入る。